

社会福祉学における「価値」としての「ケア倫理」研究の重要性

—J. トロントのケア倫理からの考察—

○ 東海大学 氏名 妻鹿ふみ子 (1468)

キーワード3つ：ケア倫理 caring with 応答する責任

1. 研究目的

ケア人材が不足し、コミュニティを維持することが困難な社会状況の中で、地域共生社会の構築が要請されている。地域共生社会を実現させるためには、ケアの思想、コミュニティの思想の検討が避けられないと思われる。なぜなら、地域共生社会の実現には主体的にコミュニティにかかわろうとする市民の存在が欠かせないが、主体的に参画するには、なぜそれが求められるかの理由の説明や、実現への道筋の議論の場が必要であり、その説明や議論には価値の検討が含まれると考えるからである。コミュニティの思想をめぐる議論の重要性についてはマイケル・サンデルのコミュニタリアニズム研究によって既に明らかにしてきた。本報告はケアの思想をめぐる議論を行うものである。

2. 研究の視点および方法

科研費による助成を受けて 2017 年度より行ってきたケア倫理研究（17K04250 2017～2019 年度）のこれまでの研究成果を踏まえ、今、制度や政策が求める連帯や相互の支えあいの必要性をケア倫理の視角から読み解く。

3. 倫理的配慮

本研究は言説分析によるものであるが、日本社会福祉学会研究倫理規程を踏まえ、研究者として求められる倫理的配慮を充分に行ったうえで実施している。

4. 研究結果

4-1.なぜケア倫理という価値なのか：3つの理由

● 理由その1：つながりの喪失の時代における「ケア倫理」再考の必要性

人びとのつながりが喪失し、共同体が脆弱化する今の社会において、それにもかかわらず、あるいはだからこそ「地域共生社会」を人びとの連帯によって構築することが要請されている。思想家広井良典によれば、つなぐことが有している2つのベクトル（第1は個人とコミュニティ、自然とのつながり。第2は個人や集団を異質な他者に開いていくという公共を作る方向性）が共に脆弱化する現代社会においては「ケア」の問い直しが必要。

● 理由その2：正義の限界を乗り越えるケア倫理の可能性

社会福祉の価値として正義は問われるが、ケアは介護や保育に矮小化して捉えられがちである。しかしながら、ケアはリベラリズムの価値観としての正義の限界を乗り越える可能性を持っておりその問い直しもまた必要だと思うからである。社会学者今田高俊によれば、正義論の限界を乗り越えることができるのがケア倫理である。正義と権利を強調する強者の論理である正義の倫理の限界は、他者のおかれた立場に視線を合わせるミクロな行

為者レベルでの他者性、もしくは関係性の論理（リレーショナルな論理）を導入した倫理としてのケア倫理を採り入れることができれば、補強される。

● 理由その3：公私二元論に閉じ込めないケア倫理とケアの担い手論展開の可能性

政治学者岡野八代によれば、公私二元論による男女の性別による役割分業をめぐる批判では、ケアされる者に加え、公的領域において依存する者をケアするために自律的に、責任をとることが難しいケアの担い手にも働く強固な排除の力をうまく扱えられていない。議論のためにはケア倫理を単純にケアの私事化批判に押し込めずにケアの担い手と受け手の境界線を引き直す作業が必要である。

4-2. ケア倫理をどうとらえるか～J.トロントのケア倫理の採用

本研究で依拠するのはリレーショナルにケアを捉えるケア倫理である。ケアすることの責任から逃れないことを何よりも重視する政治学者 J.トロントの「ケアの倫理」としての *caring with* の思想を読み解き、「ケアすること」が中心におかれ、市民がそのことを価値あるものと認識してその責任を回避しない社会にするにはどうすればよいか、という問いに応えるための論点を整理し、人びとがケアすることの責任（応答する責任）から逃れない社会＝デモクラティックな社会をいかに構築するかを明らかにする

5. 考察

トロントは、ケア実践は社会の中で広範囲に重なり合う実践で、社会全体にかかわることだとする。そのため、ケア実践のゴールは、人びとの生活の困難をめぐるニーズが充足されることだけではなく、デモクラティックな政治状況の下で、人びとが責任の割り当ての場に参加して、割り当てられた責任から逃げない社会を作ることにおかれるのである。

「われわれが尊厳ある人生を生きる」ために必要なのがケアであり、そのケアへの責任から誰もが逃げない社会を作ることこそがデモクラシーの目的だとされる。

トロントはケアとデモクラシーの関係を重視し、道徳的ではなく政治的なものとしてケアを定義しようとし、ケア実践はデモクラティックな方法で実践されなければならないし、ケア倫理がデモクラシーの中心的な価値にならないと主張する。なぜ、ケアと政治とにこだわるのか。それは、ヒトやモノをケアすることは不平等であり、特殊なことであり、多元的なものであり、そのようなケアのニーズの普遍的で平等な解決はないとトロントが確信しているからである。そこに政治の必要性が見出される。ケアのニーズに応えられる社会こそがトロントが理想とするケアリングデモクラシーが実現した社会なのである。ケアリングデモクラシーが実現した社会でのみ、*Caring with* としてのケアが可能になる。われわれは、*Caring with* の実現のために、デモクラティックな社会を目指さなければならない。ケアを社会の中心に据えるというこの議論を社会福祉学はどのように受けとめ、制度や施策や実践手法に生かすことができるのか。本報告において検討する。

Tronto, J.C. (2013) *Caring Democracy: Markets, Equality, and Justice*: New York University Press:21